

アジアの風

第14号
2008年4月10日

題字；宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター (東京府立総合教育センター)

第9回アジア児童文学大会 日本から21名が参加

7月27日から31日まで台湾の台東市で開催される第9回アジア児童文学大会には、日本から21名が参加します。当センターの会長、3名の副会長をはじめ、ほとんどがセンター会員です。

大会の企画・運営は国立台東大学の児童文学研究所（2頁に詳細な紹介）が担当し、会場は先史博物館、宿泊先は台東市の台湾ナルワン・ホテルとなっています。

詳しいプログラムはまだ届いていませんが、「土、土、土—生態、グローバル化と主体性」をメインテーマとして28

日から論文発表や講演が行われる予定です。日本からの発表者とそれぞれのテーマは次のとおりです。



大会会場となる国立先史博物館

- * 野崎斐子（武蔵野スカーレットの会）
「グローバル化する社会でのアジア児童文学の可能性を考える」
- * 大竹聖美（東京純心女子大学）
「近代児童図書における『昔話集』編纂の意味—近代日本人の朝鮮意識と昔話集」
- * 成実朋子（大阪教育大学）
『『アジア』児童文学を考える—北米で発表されたアジア系作家の作品から』
- * 大倉尚美（詩人）
「土地倫理思考からの児童文学の未来—酪農生活の中での子どもの本づくり」
- * 清水雅子（元・中学校教諭）
「自然の再生をめざす実践者の著作に学ぶ—宮脇昭の著作を中心に」

- * 和田典子（近畿福祉大学）
「日本人が歌い継ごうと選んだ里山の詩情」

総会のご案内

当センターの総会を5月18日（日）14時30分から名古屋市市政資料館（名古屋市中区白壁1丁目3 ☎052-953-0051）第2会議室で開きます。地下鉄名城線「市役所」駅下車、2番出口から東へ徒歩8分です。

2007年度事業報告・決算、2008年度事業計画・予算の審議のほか、2012年に日本での開催が期待されている第11回アジア児童文学大会の開催地についての話し合いも予定しています。できるだけ多くの会員が出席されますようお願いいたします。

なお当日13時30分から、同じ会場で理事会を開きます。

国立台東大学児童文学研究所

第9回大会を主催する台東大学児童文学研究所について、研究所教員の游珮芸さんに紹介してもらいました。

設立経緯

1997年8月、台湾では唯一の児童文学研究を専門とした大学院「児童文学研究所」が台東師範学院に設立された。2003年8月、台東師範学院は総合大学の国立台東大学に改組され、児童文学研究所も修士課程のほかに新たに博士課程を設け、現在に至っている。

「児童文学」は台東師範学院時代、長期にわたって、国語教育学科の林文寶、何三本、洪文珍らの先生たちのもとで重点科目として重視されてきたが、1991年7月、これらの先生たちの尽力で学内に児童読物研究センターが設立された。その間、毎年のように児童文学関連のシンポジウムを開いたり、叢書の出版を図ったり、「東師語文学刊」といった学術誌を発行するなど、華々しい活動を行ってきた。そして、楊茂秀と洪文瓊の両先生を迎え、より強力な研究チームが形成された。こうした児童文学の教育と研究に対する長期的な営みの結果、その研究実力が評価され、ついに教育部から「児童文学研究所」(大学院)の設立が許可されたのである。

設置目的

本研究所は、台湾や漢語圏の児童文学研究をはじめ、世界各国の児童文学を研究し、また児童文学の研究や教育推進の人材を育てることを目指し、台湾本土の児童文学資料の整理と活用、および国際的に児童文学関連の学術交流を図ることを目的として設置された。

活動と事業

本研究所が設立されてから、台湾の児童文学研究の土壌を深く耕すため、毎年、関連したシンポジウムや学術研討会が開かれている。たとえば、「台湾1945年からの現代童話研究」、「台湾子どもの本の歩み」、「台湾児童文学100(1945~1998)」などの評議会や研討会がそれであった。また、2000年から毎年大型の国際学術会議を開いてきた。たとえば、「台湾児童書翻訳と版權学術会議」、「漢語圏児童文学学術会議」、「児童文学と児童文化学術会議」などで、アメリカ、日本、マレーシア、香港、中国各国からの学者や専門家を招いて、学術会議を開いた。そのほか、社会の資源を積極的に取り込んで、出版社や「故事媽媽」(小学校を中心にお話と読書運動をするお母さんたちのボランティアグループ)団体とともに、「児童読書会の人材育成研修会」、「クラス読書会」、「読み聞かせ訓練」、「親子児童劇講座」など、多様な活動を行ってきた。

研究の面では、海峡兩岸児童文学交流及び研究、台湾児童文学資料の整理と編集、国内の子ども読書傾向の調査研究など、大きなプロジェクトを実行してきた。また集めた児童書の出版状況をリストにし、ネット上に公開したり、参考書類として刊行したりした。

なお、2002年9月に児童文学関連事業や児童文化の推進を図るため、本研究所当時の所長林文寶の発起で、研究所の所属教員と国内児童文学有志者を中心に財団法人児童文学芸術基金を設立した。基金会と研究所との協力で、現在、児童文学研究書や雑誌の出版、読書運動の拡大などの活動が活発に行われている。

刊行物

年2回、児童文学関連の学術研究誌『児童文学学刊』を発行している。昨年11月に第18号が出版された。そのほかに絵本の研究評論誌、季刊の『絵本棒棒堂』(オールカラー)も2005年9月に創刊された。本誌は毎週大学院生の絵本勉強会の討論を基礎に、専門家の寄稿やレベル高い評論、研究論文などを学生中心で編集したもので、現在すでに第11号が刊行されている。また雑誌の編集活動の一環として、各領域の専門家を招いて、半年ごとに出版された絵本の推薦リストを選び、出版社や教育関係者、そして親たちの参考になるものを目指している。

スタッフ

児童文学研究所には、現在6人の専任教員が所属している。台湾と中国児童文学専門の林文寶、児童哲学と絵本専門の楊茂秀(『絵本棒棒堂』の編集長)、文学社会学と児童観専門の杜明城(現在の所長)、日本児童文学と児童文化専門の游珮芸、英米児童文学とジェンダー研究の吳玫瑛、芸術教育とポストコロナ理論専門の郭建華である。そのほかに本研究所のもとにある児童読物センターに研究員1名が設置されている。現在、そのポストに嚴淑女がいて、研究誌の編集、学術活動の実行業務に専念している。今回、アジア児童文学大会の開催に向かっても、彼女が各種の準備業務に取り組んでいる。

未来に向けて

2007年10月から台東大学の人文学院が台東市外の知本キャンパスに移転した。本研究所も人文学院の一員として、引越した。5年後に大学すべての学科は知本に移転する予定である。現在の市内キャンパスにある図書館は、本研究所より、将来的に「国際児童文学館」として再利用することを提案した。現在、その企画にむけて徐々に話が進んでいる。



中国の絵本ブームに思う

中西文紀子

(株)ポプラ社・北京蒲蒲蘭文化発展公司

近年、中国の絵本出版にはわかに花盛りを迎えた感がある。

かなり以前から、先進諸国の絵本の状況は出版人たちには知られていたし、これを移入しようという様々な試みもあったが、大きな流れを作りだすにはいたらなかった。

ところが、四年ほど前から、絵本出版がにわかには増え、児童書の一ジャンルとして定着しそうに見える。これまで絵本というジャンルがなかったに等しい中国においては、画期的な変化だ。パイオニアたちが長年こつこつと耕してきた土壌によりやがて花が咲き実を結び始めたわけだが、経済成長にともなう購買力の向上、消費観念の変化に加え、絵本を読者に届ける新たなしくみができたことや読者側の変化も功を奏したように思う。

少し前から、海外留学組が大量に帰国しはじめた。そのなかに海外で子育てなどを通じて、海外の絵本文化に接してきた人が少なからずいた。ところが彼らが中国で絵本を探せども見つからない。やむなく海外から絵本を取り寄せたりしていた彼らが、国内版絵本を熱烈歓迎し、周りの親たちに絵本の楽しさを熱く語り、絵本ファンの輪が広がった。とはいえこの層は、全国ネットの書店が扱うにはまだマイナーだった。

折しもインターネットが急速に普及していた頃、少数の絵本と少数の読者を結びつける児童書専門ネット書店などができていった。私たちが町へ出て、幼稚園に出向いて、絵本イベントを繰り返した経験を経て、二〇〇五年秋に開いた絵本専門店・蒲蒲蘭絵本館も、こうした流れを作りだす力の一つになったかと思う。

もう一つには、幼稚園が絵本をとりいれていった動きがあるように思う。一部の幼稚園教師が、絵本には、子どもたちに楽しみながら知識を身につけさせ、言葉の力や思考力、想像力を育む、他の教材にない力があることに注目し、その活用を研究しはじめた。年々盛んになってきた幼児教育の国際交流の成果や、海外生活経験をもつ親や教師の働きかけもあったろう。

絵本研究は、国内出版されて誰もがみられる作品がようやく揃ってきた今から、本格的に進むことを期待したい。文学、美術、教育といった複数の視点が求められる、という難しさはどの国においても同じだろうが、中国語ならではの絵本のテーマなども



あるように思われ、今後の成果に期待したい。

こうして根づきははじめた中国絵本であるが、一時の流行に終わらせず真に定着させるためには、さらに手をかけていく必要があるようだ。絵本そのものや評論の質をさらに高めていくこと、手間隙かかるオリジナル絵本の育成に多くの作家画家・出版者が取り組んでいくこと、もっと純粋な絵本の楽しみが広まっていくことなどが求められると思う。それをサポートする、さまざまな角度からの学術研究にも期待される。ともあれ、中国絵本の動向、引き続き要注目だ。

◇◇雑誌紹介◇◇

『中国児童文学』第17号

2007年7月 中国児童文学研究会発行
【論文、報告等については、第5頁の「アジア児童文学に関する論文・エッセイ等」に記載】

<翻訳>

林錦/渡邊晴夫訳「大きなモンシロチョウ」
雪松/水上平吉訳「10年かわらなかつたプライド」
張秋生/藤吉孝子訳「親切なトカゲの秘密」
徐德霞/楊麗珍訳「木の枝にぶらさがった象」
王宜振/清水美香訳「小さな木の願いごと」
常瑞/田口朋子訳「こぐまの手紙」
孫幼軍/南さち訳「氷のアヒル」
肖道美/家野四郎訳「ゆらゆら橋」
ほかに、<新刊紹介>など。

【連絡先】

中国児童文学研究会・関西事務局
大阪市城東区今福東2丁目10-18-409
寺前君子氏
☎ 06-6932-7581

モンゴルの子どもの物語

ジミンゴア (梅花女子大学・大学院博士後期課程)

モンゴルで昔から語られてきた「アラン・ゴア母さんの教訓」という物語がある。Kharaba の『モンゴル民族の児童文学の概説』(1997)では、この物語をモンゴル児童文学の中で最も古い作品として紹介している。物語の内容を以下に紹介する。

昔、ドブン・メルゲンという男がおり、妻はアラン・ゴアという名の美しい人だった。夫婦には二人の男の子が生まれたが、ドブン・メルゲンは若くして亡くなった。ドブン・メルゲンの死後、アラン・ゴアにはさらに三人の子どもが生まれた。ある日、上の二人の男の子がこんな話をしていた。「お母さんに三人の子どもが生まれたぞ。この家には使用人のあの男しか住んでいない。きっとあいつの子だ」と、兄が弟に言った。この会話を聞いたアラン・ゴアは五人の子どもを家に呼んで、子どもたちに矢を一本ずつ与えた。そして、「この矢を折ってみなさい」と命じた。すると、子どもたちは簡単に折ってしまった。アラン・ゴアは、今度は子どもたちに矢を五本ずつ与え、五本の矢を同時に折るように命じた。ところが、今度は誰も矢を折ることができなかった。その時、アラン・ゴアは子どもたちにこう話した。「兄たちは、三人の弟が誰の子どもだろうかと疑っている。その疑いのわけを教えてあげよう。毎晩、夜中になるとゲルの天窓から黄色い人が光とともに入ってくるのです。その人が私のお腹をなでて、光を当てました。その人が帰る時、太陽と月のように光って天窓から出て行ったのです。だから、弟たちは天の御子なのです。みなを統治するハーンになる時が来るでしょう」と言った。アラン・ゴアはさらに続けて子どもたちを教諭した。「あなたたちは、五人とも私の生んだ子どもで兄弟なのです。あなたたちが一人一人なら、一本の矢のように簡単に敵に負けてしまうでしょう。でも、五人で団結すれば、五本の矢のように簡単に折れず、誰にも負けることがないのですよ」と言った。アラン・ゴアはそのうち亡くなった。

この物語は、モンゴル人の間で広く伝えられてきており、モンゴルの子どもたちもこの物語をよく知っている。そして、子どもが大人になってからも『アラン・ゴア母さんの教訓』通りにモンゴル人同士がお互い団結して頑張ろうと呼びかけることがある。

これとほとんど同じ内容の話が、チンギス・カンとその息子たちの中で取り交わされたこととして、当時のイスラム史家のジュワイニーはその著書『世界征服者の歴史』の中に二度も繰り返して述べており、ラシードも又それをそのまま引用している (J. A. Boyle, *The World-Conqueror* by Juvaini, p. 41, 593-594

Manchester, 1958)。古代社会では、矢は社会的制約、王者の権威、その命の伝達者としての使節の不可侵性、所有権の表示、部族内の統一、和平など種々の権威のシンボルに用いられた。「誓い」とは本来「矢を折って言う」意の象形文字だったのである。モンゴル族間における矢の使用については次の諸論文を見てほしい。

Henry Serruys, *A Note of Arrows and Oaths among the Mongols*. JAOS, Vol. 78, p. p. 279-294, 1958

護雅夫「矢を分け与える話について」—「北方文化研究報告」第七輯

特に、矢をたばねて部族の統一を近く風習は、ほとんど全世界に広まっている古い民間説話で、西欧ではイソップの「狩人と四人の息子」、イスラム世界ではタバリー Tabari のウマイヤ朝の名将ムハッラムの話、北アジアでは『魏書』巻101「吐谷渾伝」及び「北史」巻96「吐谷渾伝」に、首長阿豺の話があり、また日本では、やはりイソップ物語の影響を受けた毛利元就の話が特に著名である。(村上正二 1970『モンゴル秘史』平凡社、pp. 32-33)



第7回

韓国朝鮮児童文学セミナー

韓国の作家、編集者を迎えて

毎年4月初めに開かれている韓国朝鮮児童文学セミナー(オリニの会・オリニほんやく会主催)が、今年も神戸市灘区の学生青年センターで4月5日(土)に開催されました。第7回目の今回は韓国の作家と編集者を迎えての講演やインタビューを中心におこなわれました。

作家・評論家の金仁愛さんの講演「絵本『わたしの社稷洞』をつくって」と、絵本編集者の曹銀淑さんの講演「わたしの見た韓国絵本の現状」につづき、お二人に対する仲村修氏のインタビューがあり、韓国児童文学についてのホットな情報が盛りたくさんの内容となりました。そのほか、仲村修氏による報告「日本における07年韓国朝鮮児童文学」、オリニほんやく会の会員による自訳朗読「未紹介の説話世界から」などもあり、参加者は皆さん満足していたようです。

アジア児童文学に関する研究発表・講演等（2007年1月以降）

- ジミンゴア「民話絵本『スーホーの白い馬』の成立背景をめぐって」日本児童文学学会関西例会 2007. 1. 27. 大阪府立国際児童文学館
- 成實朋子「中国語圏児童文学の中における台湾絵本—歴史的なうねりの中で」〈台湾と日本の絵本〉プレ研究会 2007. 1. 27. 大阪府立国際児童文学館
- 鈴木穂波「頼馬『早起的一天』(『はやおきした日』)にみる読者へのアプローチ」同上
- 仲村 修「韓国児童文学・絵本の今日と明日」代々木・現代語学塾 2007. 2.
- 仲村 修「日本における06年韓国朝鮮児童文学・絵本」第6回韓国朝鮮児童文学セミナー 2007. 4. 7. 神戸学生生年センター
- 李 慶子「南北を訪問して」同上
- キム・ファン「コウノトリとゾウがつないでくれたもの」同上
- 大竹聖美「もっと知りたい韓国絵本の魅力」朝日カルチャーセンター横浜 2007. 5.20. /6.17. ルミネ横浜
- イ・ジョンヒョン『サランエンソムル(愛の贈り物)』をめぐって」日本児童文学学会関西例会 2007. 4. 21. 梅花女子大学
- 寺前君子「戦争児童文学の中の中国」中国児童文学研究会例会 2007. 7. 15. エル・おおさか
- 成實朋子「アジア児童文学としてのジレンマ—中国の戦争児童文学を中心として」同上
- 大竹聖美「今、韓国絵本がおもしろい」川口子どもの本を読む会 2007. 9.6. 川口市立前川図書館
- 下 記子「子どもたちの心に種をまく—韓国の絵本との出会い」こひつじ文庫 2007. 9.8. 練馬区立貫井図書館
- 大竹聖美「絵本で学ぶ韓国の文化」東京純心女子大学講座 2007. 9.15. /9.22. 八王子学園都市センター
- 仲村 修「児童文学で知る朝鮮」大阪府立茨木西高校文化祭 2007. 9.
- 横田由紀子「台日コドモ新聞から見えてくるもの」日本児童文学学会第46回研究大会 2007. 10. 20. 仙台市戦災復興記念館
- 浅野法子「中国民国時期児童雑誌研究—1922年刊行の『児童世界』『児童画報』『小朋友』三誌の特徴を探る」同上 2007. 10. 21. 仙台市戦災復興記念館
- 大竹聖美「韓国絵本の魅力」朝日カルチャーセンター新宿 2007. 11.9. 新宿住友ビル

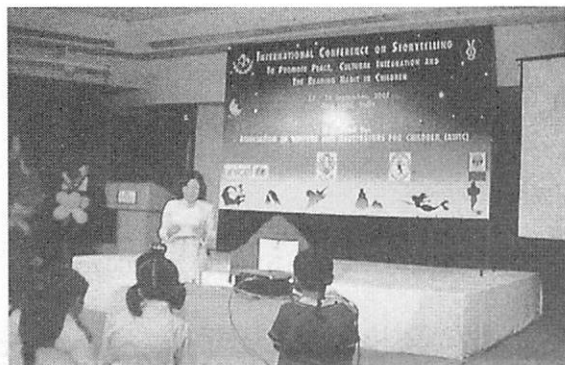
アジア児童文学に関する論文・エッセイ等（2007年1月以降）

- 成實朋子「中国語圏児童文学の中における『台湾絵本』—歴史的なうねりの中で」『論文集・台湾の絵本』(財)大阪国際児童文学館刊 2007. 3.31.
- 曹 俊彦(成實朋子訳)「物語を聴き・描き・編集し・語る—私の絵本体験」同上
- 游 珮藝「台湾における『ジミー現象』」同上
- 張 桂娥「台湾における日本の子ども絵本の受容概要とその意義—台湾絵本の今:『図画書』時代から『絵本』時代へ」同上
- 鈴木穂波「頼馬『早起的一天』論—その身近な空想世界と読者の共感を探る」同上
- 張 晟喜「日本と韓国の童謡の比較」『法政大学日本文学誌要』第76号 2007.7.14.
- 君島久子「『西遊記』—さまざまな出会い」『中国児童文学』第17号 中国児童文学研究会刊 2007.7.15.
- 小笠原治嘉「子ども文学としての『西遊記』」同上
- 新島 翠「原典訳『西遊記』と商務印書館『小学生文庫』」同上
- 成實朋子「『辺境』からの発信—台湾児童文学はじめての一步」同上
- 馬場与志子「マレーシアの児童文学作家・年紅の『一把大雨傘』について」同上
- 箱鳥かおり「外国児童文学 in 中国—児童文学者が薦める77の作品」同上
- 寺前君子「『こどものとも』の中の中国絵本—『おひやくしょうさんとえんまさま』」同上
- 仲村 修「日本の児童文学に描かれた朝鮮」『イオ』10月号 2007.10.1.
- 李 慶子「朝鮮で子どもの本が生まれたお話」同上
- 仲村 修「高まりつつある日本児童文学認識—韓国」『日本児童文学』11・12月号 2007. 11.
- 王 映方「台湾の翻訳作家—嶺月の児童文学作品の研究—松谷みよ子『モモちゃんとアカネちゃん』シリーズを中心に」『日本児童文学・文化研究誌』第2号 梅花女子大学大学院畠山研究室刊 2008. 2. 1.
- 金 永順「植民地時代の韓国の児童文学者李定鍋」同上

◇ストーリーテリング国際会議◇

インド大会に参加して

たに けいこ



2007年9月17～19日、インドのニューデリーで、ストーリーテリング国際会議が開催されました。私は、第2回世界児童文学大会のソウルで出会ったインドのジャファ氏のお誘いもあり、初めてのインド行きに異文化への期待をいだいて参加することになりました。空港からの風景は、インドの人波と車の多さに驚かされながら、大きな菩提樹が懐かしく思われ、インド女性の鮮やかな色のサリーは、今でも脳裏に焼きついています。

会場のハピタット・センターは緑に囲まれていて大変設備の整った建物。400人近い参加者の中で日本人は私1人でしたが、初日にジャファ氏と喜びの再会を果たし、日本人の留学生の女性を紹介されてその後とても助かりました。スピーチ「一つの地球 Only one earth」を英語で心をこめて発表したところ、休憩時間に数多くのインドの人たちの握手をもらい、びっくり。3日目のストーリーテリングでは、私の「森になったクリスマス」の手づくり紙芝居（英文）を実演して子どもたちに喜んでもらいました。3日間、午後はインドの不思議な音色の音楽や、操り人形劇、子どもたちのパントマイム、美しい女性たちのダンス等の異文化に触れて、感動のひとつきを過ごしました。

世界中の人びとの集まる大会で、インド、イラン、ネパール、ウガンダ等の女性たちと友達になり、紛争の多い地域で子どもたちを守るために国境を越えて、アフガニスタンなどに本を届け支援していると聞き、この周辺の状況の大変さを実感したのです。また1冊の本さえも届かない子どもたちがこの地球上にたくさんいることを身にしみて知らされ、もっと関心と支援の輪を広げて行く必要があると感じました。インドの地方に児童図書館を苦勞の末やっと作れた人に紹介され、私の英語版の絵本を役立ててもらうために送ろうと思います。人口10億のインドや近辺の様子を肌身で感じた深い旅となりました。

◇◇雑誌・資料紹介◇◇

『小さい旗』第125号 2008年3月

- ◇ 張紹民／馬場与志子訳 詩「小さいものが」ほか
- ◇ 王忠範／馬場与志子訳 詩「足の悪い伯父さん」
- ◇ 格日勒其木格・黒鶴／水上平吉訳「スキー場のハスキー犬」

◇ 中国、台湾で紹介された永田喜久男の詩ほか

[連絡先] 北九州市八幡東区尾倉3-7-10
水上平吉氏
☎093-661-4488

『まゆ』第106号 2008年2月

- ◇ バングラデシュの昔話「情け深い王子」（ムジブル・ラハマン・ブイヤン英訳）大竹桂子訳
- ◇ 「黄砂にのってきた悟空」（3）小笠原治嘉ほか

[連絡先] 室蘭市清水町2-7-8 高丸千代子氏
☎0143-24-2544

『ぷらたなす』第58号

東京都立多摩図書館発行 2008年3月
特集「韓国・朝鮮半島を描いた絵本」

東京都立多摩図書館は、1975年から韓国・朝鮮語資料を収集しはじめ、現在約1100冊を所蔵している。また2006年12月から翌年1月には「今韓国の絵本がおもしろい」という展示を開いている。そうした実績を踏まえて作成された絵本の解説目録である。「韓国・朝鮮半島の伝統・風物」「韓国・朝鮮半島のおはなし」「文学作品を絵本にしたもの」「韓国の創作絵本」「日本で発行された絵本」の5章に分けられてある。

[連絡先] 東京都立多摩図書館児童青少年資料係
東京都立川市錦町6-3-1
☎042-524-6428

あとがき

作家で日本児童文学者協会会長も務められた砂田弘氏が去る3月20日亡くなられました。アジア児童文学大会にも数回参加され、貴重な提言もされておられました。心からご冥福をお祈りします。

あと3ヶ月余りで第9回のアジア児童文学大会が台湾で開催されます。大学の児童文学研究所が主催するという、これまでに例のない形の大会だけに、期待も大きいと言えましょう。参加者の皆さん、特に発表者の6名の方々、準備をよろしくお願いします。

(畑中圭一)